とある吸血鬼の話

ランドスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある吸血鬼の話

【Ｎコード】
Ｎ９５３１Ｈ

【作者名】
ランドスター

【あらすじ】
とある吸血鬼が平安時代の日本にやって来ます。しかし、とある屋敷に侵入してあっけなく捕まってしまう。そして牢に入れられ、３日ほど放置を食らった。そんな感じで話は進みます。

序幕：1話『牢屋から始まる物語』

部屋が狭いと、誰かが言った。

夜。
妖しく輝く満月の下、外で奏でられている虫の鳴き声を聞きながら男はぼんやりと外を眺めていた。
地面に敷かれた藁の上で胡坐を掻き、部屋に一つしかない窓から満月を見る。

両手足に枷を付けられ、牢屋のような部屋―事実、牢屋である―に入れられているこの男は恐らく罪人なのだろう。
しかし男には反省の色も無く、懺悔の言葉など到底口にしそうも無い。
ただ格子の嵌められた窓から、じっと外を観察するだけ。その様子はまるで、自分がなぜ此処にいるのか理解していないようにさえ見える。

人間には有り得ない朱色の毛髪。それは男の腰辺りまであり、座っているせいで毛先が藁に触れてしまっている。
血を彷彿とさせる真っ赤な瞳。大きく欠伸をした時に覗かせた鋭利な犬歯。この二つもまた、人間では絶対に有り得ない。
そして、何より異端なのが男の服装であった。

所は日本。
時は平安。

しかし、男の服装は黒一色で統一されたスーツである。

何度も言うが、有り得ない。最早ここまでくれば、この男の存在自体が有り得ないとすら思える。そう、たとえるなら誤植のような――

「ありえん、暇すぎる……」

「仕方無いでしょう。牢屋なんだから」

男の呟きに、うんざりするような声で言葉を返す女。
ただでさえ狭い部屋に二人でいるせいか、女の声には多少の苛立ちが感じられた。

牢屋に入れられて早3日。

当初、女は自分がここに閉じ込められた事に多大な怒りを覚えていた。
しかし、今ではその怒りの殆どが諦めに変わり、女はこの状況を傍観する事にしたらしい。

艶のある金の長髪。見る者全てを魅了する美しい肢体。
男性が彼女を見れば、誰もが心動かされ胸を高鳴らせるだろう。女性ですら、その美麗さに見惚れてしまうかも知れない。
紫を基調としたいかにも高価な着物を見るに、どこぞの貴族の娘だろうか――――いや、それは無い。
日本人には決して有り得ない金色の髪。そして何より、彼女の醸し出す妖艶さと形容しがたいナニかがそれを否定させる。

恐らく、彼女は妖怪だろう。

「八雲　紫、だっけ。あんた何とかっちゅうスゴイ妖怪なんだろ？
だったらこの牢屋の結界をどうにか出来ないのかい？」

「全く同じ質問、２日前にも聞いたわよ」

名指しされた女は呆れた口調で言いつつ、物覚えの悪い男に対して深い溜息を吐く。
牢屋よりも、むしろこの阿呆の相手をしている事で精神的に参りそうな紫の心中など知る由も無く、男は目を丸くして首を傾げた。

「そうだっけ？　まぁいいや。で、どうなのさ？」

紫は再度深く、深く溜息を吐いて首を横に振る。

「出来ない」

忌々しげにそう言うと、紫は枷で束縛された両手を格子戸に近づけ、それに指先を触れさせた。瞬間――

「――ッ、やっぱり無理みたいね」

バチリ、と彼女を拒絶するかのように格子より霊撃が発せられた。

それに触れたせいで、紫の指先にはうっすらと血が滲んでいる。
紫は垂れ落ちるそれを舐め取り、視線を格子戸に向けたまま小さく舌打ちする。

「この結界を張った奴が半端無く強いのか、それともあんさんが半端無く弱いのか」

「む、そういう貴方こそどうなのよ」

男の言動に眉を寄せ、軽く睨みつけながら言葉を返す。
苛立ちから軽く殺意すら滲ませている彼女を一笑し、肩を竦ませる。

「あんさんに出来んモンを俺が出来るわけないっしょ？」

本来なら褒め言葉と取れるのだが、この男の軽薄な物言いと笑みのせいで嫌味にしか聞こえない。

「悪いけど、結界とかは俺の領分じゃないんだよ」

「あ、そう」

苦笑交じりにそう言う男を視界の外にやり、紫は視線を自身の枷へと向けた。

牢屋に張り巡らされた結界に隙は無い。込められた霊力も強大であり、自分ですら破れないほどだ。
そして、手足を封じるこの枷。見た目はただの木片だが、妖魔を封じる術が掛けられている。無論、牢屋と同じく膨大な霊力が込められている。
牢屋の結界は自分たちを外に出さないためのものであるため、直接的な害意は無い。だが、枷は違う。
これは装着している者の力を抑制し、奪い取る。それも桁違いに。
恐らく、並の妖怪ならこれを付けられただけで半日と保たず消滅する。それほどまでに恐ろしい代物。

紫は顔を上げ、男を見た。

「ん、なに？」

キョトンとした顔でこちらを見つめ返す男。
紫は何も言わず眼を細め、ただじっと男を見据えた。

風体を見るに、妖怪かそれに準ずる何かだろう。それも、他の妖怪を圧するほどの。
この枷に身を束縛されてもなお、自分と同じく平然としていられる事が何よりの証拠だ。最も、お互い力は下位の妖怪程度にまで落ちているが。
しかし、この男……

「そ、そんなに見つめるなよ。照れるじゃないか……」

男は頬を高潮させ、身体をクネクネさせた。
紫は吐き気を覚えた。そして頭痛に頭を抱えながら思う。
……この男、どこからどう見ても強そうに見えない。

八雲　紫は大妖怪である。それこそ、全国各地に棲息する妖怪の中でも最上位に位置するほどの。
あらゆる妖怪の遥か上を行き、あらゆる存在に畏怖の念を抱かせ、合間見えれば平伏せずにはいられない絶対的存在。
紫自身、自分がそういう存在である事は認識しているし、相応の自尊心は持ち合わせている。
故に、目前で気色悪く身体をクネらせる男の存在は彼女の自尊心を酷く傷つけた。

この枷を付けて平然としていられる以上、自分と同等、少なくともそれに近い力を持ち合わせている事に変わりは無い。
それはつまり、力という観点で見れば自分と同じ大妖怪級である事を意味する。のだが……

「ま、まさか俺に惚れたとか？」

「有り得ないから」

興奮して馬鹿な事をほざく男に冷水を浴びせるが如く一言の元に切って捨て、紫はガクリと頭を垂れた。
こんな奴が私と同程度の力を持っているなんて―――現実は時に残酷であると、紫は心中で深く思うのだった。

「それはそうと、もう3日も経つのか」
「次に朝日を拝めば4日目になるわね」

この二人が狭苦しい牢屋に入れられてから3日。
何の係わり合いも無い赤の他人と同じ空間で寝食を共にする。それはある意味、拷問に近い。
しかし男の社交性というか、垢抜けた態度が良かったのだろう。最初に比べ、多少は友好的な関係を気づく事が出来た。
お互いの名を知り、存在を知り、立場を認識する。そう言った所から初め、2日目になると雑談をするようになった。最も、どのような会話も全て男から始まったものであるが。

紫としては、1秒でも速くこの狭く汚らしい牢屋から脱出したかった。大妖怪としての自尊心が、このような場所に居る事を許せなかったのだ。
そして、何よりも人間如きに捕えられた自分の浅はかさと愚かさが許せなかった。それに比べ、男は自己嫌悪一つ抱いているように見えない。

牢屋に入れられる前からそうだった。
人間に連行されている時から、男の顔には屈辱も羞恥も悔しさも怒りも無い。ただ、軽薄に苦笑するだけ。それは3日経った今も変わらない。
何か脱出する手段があるのかとも思ったが、別段そうでもない。唯一、気になった事は男が牢屋に入って一言呟いたこの言葉――

《ケセラセラ》

聞いた事の無い言葉であり、言語であり、単語だった。
その時は全くの他人であったため、その言葉の意味を聞く事は憚られた。
かといって、今更その事を尋ねるのもどうかと思った紫はそこで思考を打ち切った。

「なぁ」

不意に男が声を上げた。
どうやら月が見えなくなったらしく、男は既に窓から視線を外していた。

「なにかしら？」

「お前さんは何をしてここに？」

何をして捕らえられたか――それを男は聞いていた。
紫はふっと笑い、次に男を見据えて妖艶に微笑んだ。それはまさしく、妖怪の浮かべるソレであった。

「この屋敷に住む人間にね、西行寺　幽々子という人間がいるの。

歌聖の娘でね、まるで中空を浮遊する蝶のように美しく、優雅で、儚いの」

「ふーん、それで？」

抑揚なく相槌を打つ男に対し、紫はさらに笑みを深くして、言った。

「――美味しそうじゃない？」

「それで食べようとしたけど返り討ちに合い、今に至ると」

痛いところを突かれたのか、言葉に詰まる紫。
そんな彼女を見てニヤニヤと笑い、紫はそんな男を見て羞恥に顔を赤くした。
事実、紫は返り討ちに遭った。幽々子の父である歌聖に。

「……そ、そういう貴方こそどうなのよ！」

紫と男が出会ったのは牢屋に入れられる直前である。
時間的にはほぼ同時に屋敷へ侵入し、紫は西行寺　幽々子と呼ばれる者を襲撃。そして返り討ちに会った。
男も何らかの理由で侵入し、捕らえられた。そうして二人が合間見えたのは、牢屋へ連行される時だった。

「俺？　いや、美味そうな臭いがこの屋敷からしたんで忍び込んだらナントカ妖忌って坊主に捕まってさ。それでここにぶち込まれたワケ」

「……」

紫は男の笑劇のような顛末に再び頭痛を覚えた。
しかし、よく考えたら自分も彼と同程度の理由かつ展開ではないか？
そう思うと、多大な自己嫌悪に襲われた。

「野良猫や野良犬じゃあるまいし、貴方には誇りとか無いの？」

「誇りで腹は膨れねぇよ」

「心は肥えるわよ」

「太りすぎに注意だな」

「まぁ、確かに自尊心の塊みたいな阿呆はいるけれどね」

そんなどうでも良い事を話していると、不意に牢の扉が開いた。
二人の顔が同時にそちらへと向く。そこに立っていたのは、腰に刀を帯びた一人の青年であった。

2話『縁側でグダグダ話す物語』

銀杏の葉が黄色に染まり始めた初秋。
まだ夏を感じさせる茹だるような暑さも、早朝なら感じることは無い。むしろ、肌寒さすら覚える。

屋敷の縁側に腰掛けている男は、良い具合に冷えた空気が心地よいのか深呼吸を繰り返していた。
そして小鳥の囀りを聞きながら、霧によって隠された山々を男は気だるげに眺める。
そこから顔を出し始めた太陽の日差しに眼を細め、眠気からか大きな欠伸を一つした。

「眠たそうね」

男の隣に座っていた紫が淡々とした声で言った。
彼女の方を一瞥し、男は再度小さく欠伸をする。

「夜型なんだよ、俺は。そういうあんたも夜型かい？」

理由はどうあれ、3日間も狭苦しい牢屋の中で生活を共にしたのだ。
否応無く相手の事は多少理解してしまう。男も、紫も。

「夜型というか、朝が苦手なのよ。ついでに寒いのもね」

そう言って口に手を当てると、紫も小さく欠伸をした。
その仕草はとても上品で、男のそれとは根本から違うもののようにすら見えた。

背中を逸らし、男は首を左右に回して縁側の廊下を見渡した。
しかし、人の気配は全く感じられない。最も、こんな朝早くから起きる者など早々いないだろう。

「それにしてもあの若人、いきなり牢屋から出ろなんて一体どういうつもりなのかしら」

牢屋から出されたのは、本当に唐突な出来事だった。
いつもと変わらず４日目の朝を迎えた頃、不意に訪れた青年―妖忌―彼にいきなり牢から出るよう言われ、屋敷内で待機しておけと命じられた。

「そこまで警戒する必要が無いと思ったんじゃない？　ほら、今の俺たちってコイツのせいで大半の力を抑制されてるし」

そう言って自身の手を縛っている枷を男に見せる。
足の枷は外さないと歩けないため、牢から出された際に解除された。
だが、アレは束縛の力は強いものの力を制御するという役割を担っていなかったのか、二人とも雀の涙程度しか力が戻る事は無かった。

「それにしたって牢屋から出すのは軽率すぎない？　足の枷も取る必要は無かったと思うけど」

自分たちを侮っているのか、それとも自分たちを束縛するこの枷に絶対的な信頼を置いているのか。
どちらにせよ、紫の心中は穏やかではない。
まるで掌の上に乗せられ、踊らされているような感覚と、自分の力を完全に抑えられていると思っている人間共の思考。
そして何より力を完全に抑えられ、人間の青年の命令に為すがままの自分。

心が陵辱されるような、そんな気分だった。

「もしかして、俺たちに頼みたい事でもあるんじゃね？」

「面白い冗談ね。自分を殺そうとした相手に頼み事なんて」

「いやいや、人間の思考を侮っちゃあいけませんぜ？」

薄く笑い、男は流し眼でこちらを見ながら言った。
紫はそんな男の眼を見据え、苦味を噛み潰したように目を細めた。
そんな事は分かっている。
人間を侮ったからこそ、自分はこのような辱めを受けているのだ。
紫の心中を察し、男は軽く肩を竦めて彼女から視線を逸らす。

紫も視線を前に戻し、何を見るでもなく呆と前方にある白く塗られた壁を眺めた。

「スキマ妖怪的に今の自分、どうよ？」

「最悪ね。もういっそ死んでしまいたいくらいに」

「じゃあ死ぬか？」

「それは嫌」

「あ、そう」

どうでも良いような、詰まらない問答。しかし、それしかする事が無い。

男が問いを投げ、紫が答えを返す。そんな一方的な会話が数十続いた頃、少女は現れた。

「あなた達が捕らえられた妖怪？」

「あら」

「おやまぁ、こりゃあ可愛らしいお嬢さんだ」

奥の廊下より現れた少女。

紫は目を丸くして声を漏らし、男は両手を突いて少女の方へ若干前

屈み気味に身体を倒した。
少女の純粋にして無垢な双眸を覗き込むと、男は楽しそうに笑みを浮かべる。
笑みを浮かべたのは紫も同じであった。しかし、そのベクトルは全く別方向のものである。

少女の風体を一見し、紫は瞬時に理解した。
まるで中空を浮遊する蝶のように美しく、優雅で、儚い――――そう、この少女こそが歌聖の娘なのだ。

しかし、しかしなぜだろう。
紫の心は複雑であった。その心中を投影するかのように、浮かんだ笑みは消え失せる。
呆けた表情で少女をぼんやりと見つめたまま、紫は心此処に在らずと言った風に固まっている。

「お前、こんないたいけな女の子を食べようとしてたわけ？」

「……」

「おーい。紫ちゃん、聞いてる～？」

「えっ？　ああ……そうね、そうだったんだけどね……」

苦い面持ちで視線を泳がせ、やがて誰もいない中庭へと目を向ける。
そうして紫は二人を思考の外にやり、意識を自身の内側へと沈めていった。

自分がどうしたいのかが分からない。
あの娘を食べるためにここへ来たはずだ。なのに娘と相対し、食べるのを躊躇っている。
自分は一体どうしたい？　食べたいのではないのか？
この枷が自身の力を奪っていようとも、目前にいる子供一人くらいならばどうにでもなる。
なのに、それなのに自分はどうもしようとしない。ただ手を拱き、じっと娘を見つめるだけ。

紫は再度、少女へと目を戻した。
紫の視線に気づいたのか、少女は男から紫へと視線を向ける。
そして彼女に愛らしく、美しい微笑を浮かべた。

相手を思いやる、純粋な意思。
相手を映し出す、無垢な双眸。
蝶のように儚く、美麗な風貌。

彼女の存在全てが紫を躊躇わせ、罪悪感を抱かせる。

まるで犯すべからざる禁忌に触れているような感覚。
彼女を殺してはならぬと、自らの心が明確な意思を持って警告している。

いや、本当はそんな大層なものではない。
ただ紫自身が、これがどういう事なのかを完全に理解できていないだけなのだ。
彼女の中でも徐々に整理がつきつつある。
久しく感じるこの想い。もう、永劫に抱くことが無いと思っていた感情。

『少女を殺したくない』という想い。それはつまり――――

「……情が移った？」

眉間に皺を寄せて思案した後、紫に糸目を向けて男は言った。
男の言葉に紫は自嘲気味に一笑する。そして深く息を吐き、項垂れた。

「そうかも、ね。食べようとした相手に情が移るなんて、情けない話だわ……全く」

「そりゃあ仕方ねぇよ。こんなに可愛い娘っ子が出てきたら、誰だって情が湧くってもんさ。俺だって情が移ってるし、現在進行形で」

男は両手で少女の頭を優しく撫でながら、無邪気に笑って紫に言う。
少女も男に撫でられるのが気に入ったのか、嬉しそうに無邪気な笑顔を男へ向けた。
そんな二人を見つめながら溜息を吐く紫。しかし、その顔は優しく微笑んでいた。

「私、西行寺　幽々子っていうの。妖怪さん達のお名前、伺ってもよろしいかしら？」

「八雲　紫よ」

言って紫は幽々子に笑いかけた。
紫が名乗った後、男は咳払いを一つする。
そして徐に立ち上がると、中庭に歩いていき二人の方へ振り返った。

「俺はラミア・スカーレット。見りゃあ分かると思うが、不死の王、最強の吸血鬼とは俺の事さ！」

バーン！　という効果音が付きそうな男ことラミアの自己紹介を見て、少女は感心したのか「おー」と声を上げながら拍手をする。
純粋ゆえラミアの言葉を鵜呑みにしてしまった幽々子とは対照的に、紫は今日何度目かも分からぬ溜息を吐いて惰性に拍手をしておいた。
約一名の気持ちはさておき、二人の拍手に気分をよくしたラミアは満足げに縁側へ戻り腰を降ろした。

「何だかよく分からないけど、ラミアってすごいのね」

「おうよ。困った事があったら相談にのるさね、いつでも言いに来んしゃい」

「……それじゃあ一つだけ、いいかな？　困った事と言うより、お願いなんだけれど」

「お願い？」

紫が聞き返すと、幽々子は小さく頷いた。
数秒ほど顔を俯かせて目を泳がせていたが、やがて意を決し、二人を見据えて幽々子は言った。

「私と、友達になってくれませんか？」

西行寺　幽々子にとって、友と呼べる者は少ない。
数えで齢６つほどに彼女は、生まれてこの方屋敷より出たことが無い。故に、友など出来るはずもなかった。
まるで箱庭。箱入り娘とは、まさにこの子のような者を言うのだろう。
唯一、彼女の遊び相手となってくれる御庭番―魂魄　妖忌―もここ数ヶ月ほど多忙なようで相手をしてくれない。
彼女の父も父で忙しいらしく、最近の幽々子はとても暇で暇で仕方が無かった。故に、自身と遊んでくれる友が欲しかったのだ。

「うん、別にいいけどさ……その、友達って、なんだ？」

「え……」

まさかそんな切り替えし方をされるとは夢にも思っていなかったのだろう。
幽々子は口を開けて呆然とラミアを見つめ、彼の馬鹿すぎる発言に紫は頭を抱えた。

「馬鹿ね、友達っていうのは……あれよ、友人の事よっ」
「なるほど。やっぱ紫さんは頭良いなぁ～」
「……」

ラミアが馬鹿で助かったと、紫は心底思った。
友達とは何か？
簡単そうで、何気に難しい質問。
知人よりも親しい関係。ならば、一体どの程度親しければ友達になれるのか。
友達という関係に、年月は関係あるのか――――答えは否だろう。

「というわけで、俺と嬢ちゃん――じゃなくて幽々子だったな。は、今日から友達ってやつになりました！　はい拍手！！」

率先して自らが拍手を始め、次いで幽々子、苦笑交じりに紫が続いた。
ラミアの友達宣言に幽々子も嬉しそうに手を叩いていたが、やがて手を止めて紫を見る。
そんな幽々子の眼を見つめ、何かを察した紫は柔和に笑って優しく、優しく言った。

「幽々子さえよければ」

「――うん！」

元気よく頷く幽々子の無垢な瞳を見て、紫はその胸中に深く、深く想う。
それは、自身が生を受けて初めて抱く想いであった。
守りたい――単純にして、純粋な感情。妖怪が抱くにしては歪で、人間に対して抱くにも歪すぎる想い。
だが、あまりにも明確すぎるその感情は大妖怪―八雲　紫―をして、否定する事など出来るはずもなかった。いや、否定する気など最初から無いのかもしれないが。

「友達ってのはあれだろ、友人と一緒だから……あれ？」

不意にラミアは眉を顰めて考え込む。
そんなラミアを一瞥し、紫はあからさまに視線を逸らした。
友達は友人で友人は友達。ということは友達は友人だから友人は友達なわけで友達っていうのは友人だから――――

「意味が分からん……」

「どうしたの？」

「いやね、友達ってのは一体どういう事をする間柄なんかなぁ～と思いまして……」

自分よりもかなり年下である幽々子に聞くのは精神的に相当クるものがあるらしく、ラミアは珍しく言葉を濁す。
そんな彼の心境など知らない幽々子は、気にせず自分の思う友人像を彼へと説明する。

「互いを思いやり、助け合い、一緒にいて楽しいって思えるのが友達なんじゃないかしら」

「へぇ～」

ラミアは感嘆の声を漏らす。
紫はなぜか口元にだけ笑みを浮かべて項垂れていた。

「二人は妖怪だから、かなり長い年月を生きているんでしょう？」

「永遠の１７歳ですが何か？」

「右に同じ」

即答するラミアと紫。
そんな二人の反応に乾いた笑みを浮かべつつ、次の質問をする幽々子。

「それなら友達って沢山いるの？」

「二人いるな」

「二人いるわね」

二人の返答に嫌な予感しかしない幽々子。

「……もしかして、それって――」

「紫さんと幽々子」

「ラミアと幽々子」

「……」

堂々と言い切る二人を見て、幽々子は酷く申し訳ない気持ちになった。

まるで聞いてはいけない事を聞いてしまったような、そんな気分に陥る幽々子を他所に、二人は別段気にした風もなく平然としていた。

「友達が俺たちだけとか、寂しい奴だなぁ」

「自分で言ってて悲しくならない、それ。というか、数秒前に友達の定義を知った奴が言う台詞じゃないと思うけど」

……いや、かなり気にしていた。
お互い視線を合わさず全く別方向を見ながら、しかし嫌味１０割の会話を繰り広げる。

「いーや全然。だって俺は紫さんと違って友達が１０００人はいるからな……この中に」

そう言って自身の胸を指差し、ふふんと勝ち誇った表情でラミアは天を仰いだ。
そんな彼を可哀想なモノを見る目で眺め、次に満面の笑顔をラミアへと向けて紫は言った。

「そうね、凄いわね。心の中に友達がいるんですものね」

「いやいや、それほどでも」

言ってラミアは紫との会話を打ち切り、幽々子へと視線を戻す。

「まぁそんなわけで、俺も紫さんも友達はいません。うわぁ、自分で言っててサブイな……」

「それを言うな。余計に虚しくなるから」

「あははは……」

最早、笑うしかない幽々子であった。

3話『歌聖と出会う物語』　序幕　了

喉がチリチリと痛んだ。

顎を上へと持ち上げたまま、ラミアは目前より自分を射殺すほどの鋭い眼光で睨みつけている青年を見た。

青年は腰に帯びていた刀を抜き、その切先をラミアの喉元へと向けている。いや、当てていた。

「紫さんヘルプ！」

喉元に肉薄する刃物の脅威に顔を引き攣らせながら、ラミアは視線を紫へとやって助けを求めた。

しかし紫は意味が分からないと言った風にキョトンとした顔で首を傾げる。

「へるぷ？」

「助けて！」

言葉の意味が判っていなかったらしい紫に日本語で言い直し、再度助けを求める。

しかし、その訂正はあまり意味をなさなかった。

「無理」

「即答っすか！？」

現実は非情である。

どうしてこんな状況になってしまったのか……。

先ほどまで、ほんの5分前までは楽しく談笑をしていた3人。しかし、そこへ青年が現れた事で空気は一変する。
青年の名は魂魄　妖忌。幼少より西行寺家に仕え、今では御庭番として都でも五指に入る程の剣の腕の持ち主である。
そんな彼とラミアは4日前に屋敷内で邂逅した。侵入者と御庭番という最悪の形で。
その後は知っての通り、ラミアは一悶着の後に捕えられ、牢に連行される途中で紫と出会った。

そんな訳で、力を極限まで抑止されている二人であれど、妖忌からしてみれば主人に害を為す危険分子に他ならない。
主である歌聖の命令がなければ牢から出す所か、二人の首は彼の刀によって刎ねられていただろう。
妖忌としても殺す、或いは温い処断だが枷を付けたまま屋敷から今すぐにでも追放したい気分だった。
しかし、それは出来ない。なぜなら、自身の主である歌聖より『二人を生かし、枷を付けたまま牢より出す』よう言われているから。
故に本来ならラミア達は刺々しく、警戒した態度を取られる程度で済んでいた筈なのだが、そこに幽々子がいたのが不味かった。
幽々子とその幽々子を食らおうとしていた妖怪。そして、誰にも気

づかれず屋敷に侵入した人間でも妖怪でも無い存在。
仮に今の二人が下位妖怪にも劣る力だとしても、少女一人殺す事など容易い。倫理や価値観が崩壊している狂人であれば、巷の子供だって簡単にやってのけるだろう。
それが妖忌の判断力、思考力を奪った。内より湧き出す激情と、頭を焦がすマグマの如き血流が、本来の彼では有り得ない短絡的な行動を引き起こした。
二人と楽しく談笑する幽々子など見えず、そんな彼女を殺し、食らおうなどと考えているとは到底思えない二人など見えず――――

妖忌は妖怪が須らく嫌いという訳ではない。
正々堂々、清廉潔白を好む鬼のような妖怪にはむしろ好意的な感情すら抱いている。だが、そこに主ないし大切な存在が係わってくれば話は別だ。
歌聖やその娘である幽々子に危害が及ぶような事があれば、妖忌は身を挺してその危機から彼らを守り、仇名す脅威を一切の容赦なく殺すだろう。

そんな彼の御庭番たらしめる思考回路が導き出した状況が今である。

「やはり貴様も幽々子様が目的だったのだな！」

「え、えぇ～……」

妖忌の有頂天すら凌駕した烈火の怒声を浴び、理不尽だと言った風に目尻を下げてか細い声を出すラミア。
そして眉を少しだけ顰め、ラミアは恐る恐る伺うように妖忌へと尋ねた。

「目的って、それはどういう意味で言ってるんすか？」
「惚けるな！　貴様もそこの妖怪と同じように幽々子様を食らおうとやって来たのだろう！？」
「貴様も？」

不意に幽々子が声を上げた。
誰に言うでもなく、ポツリと疑問に思った事を言う。

それを聞いて紫はバツが悪そうに顔を背け、ラミアは面倒臭そうに頭を掻きながら小さく舌打ちをした。
妖忌はラミアの喉元から刀を離し、だが切先と視線はラミアと紫へ向けたまま幽々子の方へと向かう。
そうして妖忌が幽々子を自分の後ろへと庇っている間にラミアは顎を下ろし、気だるげに首を回した。

ボキ、ボキ、と数回ラミアの首の骨が鳴る。
妖忌より放たれる殺気のせいで何時の間にやら小鳥の囀りは聞こえなくなっていた。
この場を支配するは微かな風の音と、ラミアの骨の音―――それだけ。

「此奴らは幽々子様を食らおうとやって来た妖怪共です」
「紫とラミアは私を食べにここへ来たの？」

「はい」

妖忌の肯定を聞いた幽々子は、彼の背中越しから無垢な瞳を二人へ向けた。そこから感情を読み取る事は出来ない。
その眼に映るのは、苦笑しているラミアと金の長髪で顔を隠す紫。
二人は今、何を想い、何を考えているのだろう。

「私ってそんなに美味しいのかな……」

「は？」

予想の範疇を3つくらい通り越した幽々子の呟きに妖忌は間の抜けた声を上げた。
何の脈絡も無く――いや、多少はあるのだろうか。幽々子は唐突にそんな事を言い出した。
別段気にするでもない、1日経てば忘れるようなどうでも良い疑問。
だが、今この瞬間のみ非常に興味が湧いたのだ。
だから幽々子は問う。二人に。自身が美味であるかを。

「ねぇ、私ってそんなに美味しいの？」

子供だからこそ聞ける疑問。
恐怖感を微塵も覚えず口に出し、自らを食おうとしていた相手に問いを投げる。

狂気すら感じさせる行為。子供のみが保有する純粋にして壊れた一面。

「うわぁ……ものっ凄いストレートに聞くのな」

普通に自分へと聞いてきた幽々子に、ラミアは感心しつつも呆れた。天然というか何と言うか――――これが子供と言う奴か。

「すとれーと？」

「真っ直ぐ――え～、回りくどい言い方をせず、ズバッと言うってこと」

「ふーん。それで、私は――」

「美味しいと思うわ。とても、とてもね」

幽々子の言葉を遮り、紫は言った。

妖艶に笑って、幽々子を見つめ、噛みしめるように、その妖怪は言った。

「見ているだけでこんなにもそそるのだから、きっと美味しいに決まっているわ」

殺意もなく、敵意もなく、害意もなく――――ただ、紫は幽々子を眺めて笑うだけ。
その食虫植物めいた笑みは獰猛さこそ無いが、妙な気品と言いようの無い不気味さが入り混じっていた。
今の八雲　紫を一言で表すのならば『禍々しい』が一番的確だと言える。

「そんなに美味しいんだ、私」

幽々子は自身の手を見つめた。
そしてあろう事か、自分の指を口に入れて噛み付いた。

「ゆっ、幽々子様！？」

「イタッ！　てゆうか不味っ」

驚愕に目を見開く妖忌。紫とラミアは幽々子の予想外過ぎる行動に口をポカーンと開けて唖然としている。
そんな状況を作り出した当の本人は涙目で、若干血が滲む指を恨めしげに睨んでいた。
やがて非難するような目を紫へと向ける。その双眸に真っ向から見つめられた紫は、しかし未だに唖然としていた。

「紫の嘘吐き！　全然美味しくないじゃない！！」

「そ、そんな事言われても……」

「カニバリズムじゃないんだからさ……」

今までの紫からは決して想像出来ないほど動揺している彼女を背に、ラミアは如何ともしがたい表情で呟く。
ラミアの呟きが聞こえたのか幽々子は首を傾げ、丸い眼に彼を映し出した。

「蟹はりずむ？」

「人肉嗜食――じゃあ分からんか。あ～……うん。人肉を好んで食べるレア――じゃなくて特異な人間のこと。言っとくけど、蟹は全く関係ないぞ」

「へぇ～」

幽々子は噛み付いた箇所から滲んでくる血を舐め取りながら適当に相槌を打った。

「何だか知らないが、随分盛り上がってるじゃあないか」

声がしたかと思うと、背後の障子がスッと開いた。
現れたのは壮年の男。ラミアと紫を一瞥し、最後に妖忌を流し目で見る。

「客人の前で物騒なモン振り回してんじゃねぇ」
「客人？」
ラミアが疑問の声を上げたものの、それは男には届かず黙殺される。
「ですが――」
「いいから仕舞わねぇか」
食い下がる妖忌を軽く睨み、声を荒げて男は言う。
「……はっ」
妖忌は渋々引き下がり、刀を鞘に納めた。そして幽々子の手を掴むと、彼女と共に数歩下がる。
その場で妖忌は片膝を突き、男へと頭を垂れた。だが、依然として警戒を緩める事は無い。
そんな妖忌の態度に男は深く溜息を吐き、その御庭番としての律儀さと融通の利かなさに感心と呆れを覚えるのだった。
「ウチのが迷惑掛けちまったみたいだな。それに、幽々子の相手も

してくれたようだし」

「父様、痛いです」

穏やかな笑みを浮かべ、男は幽々子の頭を撫でた。
幽々子はそれに対して目を細めながらも、親に褒められて喜ぶ子供のような年相応の笑顔を男に向ける。
ラミアはその光景を苦笑交じりに傍観していたが、ふと視線を紫へと移した。

「紫さん？」

「……」

返事は無く、紫はじっと男を見据えたまま微動だにしない。
今までのどれよりも恐ろしい顔付きで睨んでいるのに、清水の如き静けさでいる。それが余計不気味に思えた。
そんな紫を見たラミアの脳裏に一つの推測が浮かび上がる。
――恐らく紫が戦い、敗北した相手。それがあの男。

「――の、はずなんだけど……」

ラミアは男を注意深く観察する。だが、どこからどう見ても強そう

に見えない。
潜在的な力も感じないし、かといって特異な能力を持っていそうにも見えない。
まるで凡庸。あれでは、そこらにいる荒くれ者の方がまだマシだろう。ならば、紫が敗北した直接的な原因は他にある。
たとえば、大妖怪すらも屈服させるほどの武器なし道具があったとか――――

そこまで考えた瞬間、ラミアの脳裏に電流が奔った。
思考回路が全て繋がったかのような快感を覚え、ラミアは自然と目を見開き、薄く笑う。

「あの札か……」

自身も妖忌に張られ、何の抵抗も出来ず一瞬で力を完全に封じられたアレ。
紫ほどの妖怪を凡夫であろうこの男が負かすには、人間相手という事で油断している紫の隙を突いて例の札を張るしかない。

この西行寺という屋敷は妙に強力な霊具がある。
あの枷しかり、霊の札しかり――そして、妖忌の持つ刀しかり……。

あの刀で斬られれば、紫と言えどタダでは済まないだろう。
刃こぼれ一つ無い名刀の上に、何らかの特異点が上乗せされている。
それが何かは不明だが、おぼろげながらそれがどういった効果なのかは予想がついた。

「おいおい、そんなに睨むなよ。俺は別にお前さんを殺そうなんて思ってない」

「……」

紫の殺意すら篭った視線に苦笑しつつ、彼女を宥めようと男は自分に敵意が無い事を伝える。
だが、それでも紫の眼光は弛まない。むしろ一層険しさを増していた。

「こえぇ～……なあ、アンタ」

肩を竦めてワザとらしく怖がりながら、紫の隣に座っているラミアへと呼び掛けた。
ラミアの方は自分が呼ばれるとは思っていなかったらしく、辺りをキョロキョロと見渡してから自分を指差し男を見る。

「……え、俺？」

「そう、アンタだよアンタ。名前、なんつったっけ？」

「ラミアだけど」

「ラミアはこの妖怪の連れなんだろ？　ちなみに俺の事は歌聖様と呼ぶがいい。そして崇めろ」

「いや、崇めないから。それと、俺は紫さんの連れではありません」
堂々と胸を張り、そんな事を言う歌聖に嫌な親近感を覚えつつ、ラミアは彼の問いを否定した。
それに歌聖は首を傾げ、眉を顰めてさらに問いをラミアへ投げる。

「あれ、知り合いじゃないのか？　それと紫って言うのか、アンタ」
「どころか、４日前まで赤の他人だったよ」
「……」

ラミアは歌聖の質疑に応答したが、紫は彼の呼びかけに依然として無視を決め込む。
そんな紫の頑なな態度に嘆息しながら歌聖は二人に言う。

「まぁ、何だ。色々あったけど、ここで会ったのも何かの縁だろ。妖忌」
「はっ」
「今すぐ飯の支度だ。そこにいる二人の分も忘れずにな」
「ですが――わかりました……」
「わたしも行く～」

未だに納得がいってないのか、苦味を噛み潰した面持ちで妖忌は幽々子と共にその場を後にした。
妖忌がいなくなった今、この場には歌聖、ラミア、紫の三人だけという事になる。それはつまりどういう事か。

ラミアと紫は二重の意味で唖然とした。そして次に二人は笑った。
ラミアは軽薄に、紫は凍てつくように。

「どういうつもりかしら。自分の護衛を遠ざけるなんて」

「客人に警戒する必要はねぇだろ？」

「客人？　あなた、４日前にあった事も覚えていないの？」

「そこまでボケてねぇよ。ただ根に持ってないだけさ。あの時の事をずっと引きずってても仕方あんめぇ？」

「……」

つくづく気に入らない。どうしてこうも、こいつは自分を苛々させる？　———紫の腸は煮えくり返っていた。
ここまで誰かを憎み、嫌悪したのは初めてかもしれない。ここまで来ると、逆に清々しいとすら思えてくる。

「それに、いざって時は——」

歌聖が懐より取り出した一枚の札。
それを見て紫とラミアは驚愕に顔を強張らせ、心中の底に微かな恐れすら抱いた。

自身を完全に束縛した凶悪極まりないソレ。
並の妖怪であれば、一瞬にして命の灯火を消しかねないソレ。

「こいつがある。普段のお前さん達には、油断してない限り俺程度じゃあ張れない。だが、枷を付けている今なら話は別だ」

一呼吸置き、紫の傍まで行ってその札を近づける。
枷の付いているこの状態で札を張られれば、間違いなく絶命は必至。
それを理解していてもなお、紫はじっと愚直なまでに歌聖を見据え続けた。

「今のお前さん達相手なら、俺のような凡人にでも張れる。それが妖忌のような手練れなら遥かに容易くなるだろうな」

歌聖はくるりと身を翻し、札を懐にしまった。

「使う気はさらさら無いけどね」

「なんで？」

「だってこれ、あと一枚しかないし。勿体無いだろ？」

「ふーん……」

歌聖の言動にラミアは目を細めた。

あの札が一枚しか無いという事はつまり、一人しか殺せないという事。

仮に紫がこの場で歌聖へと襲い掛かり、あの札を張られれば間違いなく滅される。だが、自分ならどうか？

確かにあの札は強力だ。しかし枷を付けられた状態であれど、自分ならばたとえ１０００枚張られようとも死にはしない。なぜなら、この身は不死だから。

そこまで考え、ラミアは思考を打ち切った。

「アホらし……」

そんな面倒な事をして何になる。

自分はこの男が嫌いではない。好きでもないが。

別段殺したい訳でもないし、殺さないとどうにかなる訳でもない。

それに、たぶん歌聖は幽々子の父親だろう。友達の父親を殺すのは何となく後味が悪そうだ。

「さてと、もうすぐ飯だし、そろそろ腹割って話そうか」

そう言うと、歌聖は二本の小さな鍵を取り出した。
それをラミアと紫の枷の鍵穴に刺し、あろう事か二人の拘束を解除した。

「……気でも触れた？」

「人を狂人呼ばわりすな。それ、付けたままだと飯が食いにくいだろ？」

紫にジト目を向けながら、当然の事のようにそう言う歌聖。
それは紫の言うとおり、端から見れば狂人としか思えぬ行為。
敵に刃物を渡し、殺してくれと言っている様なもの。
此処まで来れば最早怒りすら通り越し、紫は呆れて負けたと言わんばかりにクスクスと笑った。

「……なんだよ」

「ふふっ――いや、ね。親子揃っておかしな人間だと思っただけよ」

「うっせぇ！　大きなお世話だ」

「あら、褒めてるのに」

「嫌味にしか聞こえねぇよ」

微笑む紫とは対照的に歌聖は憮然とした態度で顔を背けた。
そうして歌聖をやり込め、普段どおりの自分を取り戻せた事で紫の心中も穏やかになりつつあった。
煮えくり返るほどの苛立ちは呆れや妥協という形で治まり、「まぁ、こんなのも偶には悪くないか」と紫は思うのだった。

「歌聖様」

ラミアが唐突に歌聖を呼ぶ。
まさか本気で『歌聖様』と呼ばれるとは思っていなかったのか、数秒呆然としながらも威厳を保とうと胸を張る。
そしてなぜか徐に声色を変え、ラミアへと返事をした。

「なにかね？」

何だコイツ、と言わんばかりな目を歌聖へと向ける紫。
しかし歌聖はそれを無視し、ラミアも歌聖の声色の変化を無視して話を進める。

「いやさ、幽々子の事なんだけど……」

珍しく真剣な表情になるラミア。それを見て、歌聖は全てを察した。くわっと目を見開き、威圧するようにラミアを真っ向から睨みつけて言い放つ。

「嫁にはやらんぞ！」

「いらねぇよ！　俺はロリコンじゃない！」

即答するラミア。その返答を聞いて歌聖はさらに目を剥き、怒声を張り上げた。

「貴様ァ！　俺の娘をいらないだとぉ！？　それとろりこんって何だぁ！？」

「お前がやらないって言ったんだろ！　それと、ろりこんって言うのは――――って、何で俺ロリコンの説明してるんだ……？」

自分が歌聖に何を聞こうとしていたのか思い出そうと、ラミアはこめかみに指を押し当てる。
歌聖は未だに憤慨しているようで、鼻息荒く、肩を揺らしている。

「あー、そうそう。幽々子の事を聞こうとしてたんだ」

「嫁にはやらんぞ！」

「いらねぇよ！　俺はロリコンじゃ――――」

「それはもういい」

「あたっ」

ラミアの頭を引っ叩き、紫は無限ループしそうな流れを打ち切る。

「それで、幽々子がどうかしたの？」

「いやさ、俺の気のせいだと思うんだけどアイツから妖の力を感じたんだ……ほんの僅かに、だけど」

自分の言動に自信が無いせいか、言葉を濁してラミアは言った。
妖の力とは、つまり妖力。人間が保有する事は決して有り得ない力。

人間の持つ潜在的な力は霊力なし気力であり、妖力は有り得ない。
逆に妖力を保有する妖怪が霊力を持つ事は有り得ない。
この法則を超越するのであれば、その者は人間と妖怪、双方の血が無ければならない。

「アホ抜かせ。俺も死んだ妻も生粋の人間だ。言っとくが、何代遡っても妖怪の血なんて入ってないぞ」

「そっか……それなら、やっぱり俺の気のせいだわ」

そう言うと、ラミアは誤魔化す様にあっけらかんと笑った。

「ったく、人の娘を何だと思ってやがるんだ」

「悪い悪い」

ラミアが謝罪をしている最中、幽々子が廊下を駆けて戻ってきた。

「ご飯が出来たよ！」

「おお、そうかそうか」

駆け寄ってくる幽々子の両脇に両手を入れて高く上げると、歌聖はその場でくるりと回って見せる。
その行為が気に入ったのか、幽々子は無邪気に笑った。

「確かに美味しそうな匂いがしてきたな」

「これは……秋刀魚かしら？」

「すごい紫！　よく分かったね！」

歌聖に床へ降ろされた幽々子は紫に小走りで近寄る。

紫は傍に来た幽々子の頭を撫でながら、何かを思い出すかのように目を閉じた。

「秋刀魚を食べるのなんて何年振りかしら……」

「さてと、そんなら食べに行きますか！」

手を叩き、歌聖はその場にいる者へ呼び掛けた。
応じるようにラミアと紫は縁側より立ち上がり、先行する歌聖の後ろを着いて行った。
幽々子はそんな二人の真ん中に立ち、ラミアに左手を、紫に右手を繋いでもらっていた。

3話『歌聖と出会う物語』　序幕　了（後書き）

今回で物語の導入部分は終わりです。

二幕：４話『進展する物語＋河童と天狗』

逢魔が刻―――夕と夜が入り混じる、一日の中で最も切なく、美しい時間。

やがて闇が世界を蹂躙し、人間が原初より恐怖する黒の世界がやって来る。

月光のみが輝く夜。人間が往来する時間は終わりを告げ、魍魎共が跋扈する宵闇がやって来た。

紅く染まった世界は黒く塗りつぶされる。

それは平安の都も例外ではない。

昼時は活気に溢れ、人々が最も行き交う町も夜では人っ子一人見当たらない。

横行するは魑魅魍魎。本能に身を任すは跳梁跋扈。その中心に君臨するは九の尾を持つ妖狐。

妖しく光る双眸は総てを見下すように眼前のソレらを眺め、蔑むように睨み付けていた。

この世の男性を魅了して止まない絶世の美貌を持ち、艶のある長い金の髪を冷えた夜風に靡かせる。

人間にしか見えない外見は、しかし頭部にある二つの耳と尾てい骨の辺りから生える九尾によって否定される。

「また五月蝿いハエどもが湧いてきおったか」

妖艶に笑う九尾。その笑みは見る者を例外なく恐怖させ、身を芯より竦ませる。

「これ以上、貴様の勝手にはさせん！」

九尾と対峙するは数人の陰陽師。
だが、１人を除いて陰陽師たちは既に戦意を失いつつあった。
大妖怪――九尾より放たれる絶対的で圧倒的な威圧感。そして人間の心に原初よりある感情―恐怖―を暴走させる程の殺意。
殺気は凝固し、殺意となり、強烈なまでのそれはこの場にいる全ての陰陽師に自身の死を連想させた。

「ほう……妾の前に平伏さず、むしろ睨み返してくる人間がおるとはのぉ」

他の陰陽師は地に虫ケラの如く這い蹲り、「もう終わりだ、おしまいだ……」と嗚咽のような呟きを漏らしている。
戦前より勝負は決していたのだ。所詮、人間などでは大妖怪たる九尾に勝てるわけが無い。
だが、それを理解していてなお膝を折らず、眼前に君臨するこの場の絶対者へ反逆するものがいた。

「面白い。実に愉快だぞ人間。それで、お主は妾を殺したいのかぇ？」

「当たり前だ！　貴様が都を恐怖に陥れ、どれほどの罪無き人々を苦しめ殺したと思っている！」

「ふむ……覚えておらぬな」

怒りに身を任せ、声を張り上げる男とは対照的に九尾は冷静だった。男の問いをどうでもよさそうに、面倒臭そうに一言の下に切って捨てる。
それによって男はさらに激昂し、顔を真っ赤にして叫ぶような怒声を九尾に向けた。

「貴様ッ！」

「……及第点、と言った所か」

九尾がポツリと呟いた。

「ガ――――ッ！？」

刹那、男の右腕が消し飛んだ。
否、肩口より何らかの力によって引き千切られたソレは中空を舞い、炎に包まれ灰となったのだ。
悲鳴すら上げられず、男は片膝を突いて傷口を左手で添えるように押さえる。
容赦なく、ドクドクと、男の傷口より血は流れていく。このままの

状態であれば恐らく、放っておいても後１０分とせず絶命するだろう。

「反応が凡庸過ぎる。言動も凡庸過ぎる。それではつまらぬ、全く以てつまらぬのだよ」

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

痛みに喘ぐ男など眼中に無く、心底失望したと言わんばかりに九尾は頭を抱えた。
そして再度男を見やり、右手の人差し指だけを立て、言った。

「今一度機会をやろう、人間。妾を楽しませてみせよ。出来ぬのなら———」

凄惨な笑みを浮かべる九尾の右手に紅炎が宿る。
子供が玩具で遊ぶような無邪気さにも似た九尾の行為は、まさに子供のように残忍で容赦が無かった。
楽しければもっと遊び、詰まらなくなったのなら捨てる。ただ、それだけのこと。

男は死を予期した。そして、それは逃れられぬものだと理解した。
是非もなし。仕方が無いことなのだ。ならば、甘んじて受け入れよう。
だが、死ぬ前に一つだけ。一つだけ九尾に問いたかった。

「……九尾よ、なぜ変わった？」

「なぜ、とな？」

質問の意図が分からないのか、九尾は微かに眉を顰める。

「弱者を嬲る事を最も嫌っていた貴様が、なぜこのような事をする？」

「……くっ、あはははははは――――！！」

唐突に身を捩り、何がおかしいのか九尾は哄笑する。
金色の長髪を振り乱し、狂ったように笑い続けるその姿は見るもおぞましく美しい。
やがて笑いがピタリと止まる。石のように微動だにせず、前髪で覆われているせいでその表情を読み取ることは出来ない。
数秒の後、緩慢な動作で男を見下すように睨み付けた。射殺すほどのソレを正面から受け、男は全身が総毛立つのを感じた。

「本来の姿に戻っただけだよ」

口調が変わる。熱を感じない、冷え切った声。
殺意もない。敵意も無い。禍々しさも、おぞましさも無い。
なのに、なのにどうしてこんなにも――――眼前の妖怪が今まで以上

に恐ろしく見えるのだろう？

「……な、に？」

男は乾いた喉より声を絞り出す。

「妖怪とは人間を殺し、食らい、蹂躙する。そういうモノだろう？」

九尾は嗤う。裂けんばかりに口元を吊り上げ、獰猛な肉食獣の如く嗤ってみせる。

男の心は折れつつあった。しかし魂を奮い立たせ、震える声で問い返そうと口を開く。

「それは――――」

だが、問いを投げる事はもう叶わない。

「もういい、お主との会話は飽いた。灼かれて死ね――」

興味が失せたのか、九尾は心底つまらなそうに憮然とした表情で男を見据えた。

そして炎の宿る自身の手を男へと向けた。直後、炎は一瞬にして男

を飲み込んだ。

「ギィアアアアアアアアアアアアアアアアアア――――――――！！！！」

灼熱の劫火に焼かれ、狂おしいほどに身を捩り、転がり、暴れる男。
その様はまるで虫ケラのようで、九尾を酷く楽しませる。

「良い声で鳴くではないか！　愉快、実に愉快だぞ人間！！」

震え慄く陰陽師と卑屈に嗤う魍魎どもの中心で、九尾は狂気に顔を歪め笑い続ける。
高らかに、喘ぐように、狂うように、喚くように――――それは止める者は、誰もいない。
そして今日も夜は過ぎてゆく――――狂宴が止められる事の無いままに。

＊　＊　＊　＊

吸血鬼と大妖怪が西行寺家と交友を持ち始めてから早十年の月日が流れた。
十年の時を経てなお、西行寺との関係は続いている。いや、むしろより強固なものになったと言って良い。

それはともかく――

陽も高く上がったお昼時。
吸血鬼は川にいた。そこには天狗と河童もいた。
そして三人ともキュウリをシャリシャリ食べていた……非常にシュールである。

「美味すぎるッ！！」

河童は幸せそうに顔を綻ばせ、至福の一時を味わっていた。
シャリ、という小気味よい音。適当な歯ごたえ。瑞々しく、新鮮な味。
全てが彼女の舌を唸らせ、腹を満たす。有態に言えば、頬っぺたが落ちるほど美味いというヤツだろう。

「たりめーよ。俺が丹精込めて育てた自家製キュウリなんだ。美味しくないはずがない！」

自信満々にそう言い切り、胸を張る吸血鬼。
雲ひとつ無い快晴な昼間にも係わらず、今日も今日とてこの吸血鬼は元気であった。
ラミア・スカーレット。（自称）最強の吸血鬼にどうやら日光は効果が無いらしい。最も、今更過ぎる気もするが。

「……あの、キュウリとかどうでもいいんで。それよりも私のカメラ、早く直してくれません？」

河童と吸血鬼のノリについて行けず、淡々とした口調で天狗は言う。

「とか何とか言ってる天狗もキュウリを食べているのであった」

「うっ……べ、別にいいじゃないですか！　こんな沢山あるんですし――って、あれ？」

流し目で自分を見ながらニヤニヤと嫌らしく笑うラミアへ天狗は苦し紛れに言い返し、数十本はあるキュウリの山を指差す――つもりだった。
天狗は我が目を疑った。自身の眼を何度も擦り、一点を凝視して「あるぇ～？」と狐に抓まれた様な表情で呟く。

つい先ほどまで山のようにあったキュウリ。それが無いのだ、一本も。綺麗さっぱり山は消え、そこにキュウリがあった事すら疑いたくなるほど何も無かった。
あるのはキュウリが入っていたであろう笊のみ。

「……ありえん」

天狗はふと河童を見やる。
そこにはキュウリを限界まで口に含み、同じく限界まで自分のポケットに入れた河童がいた。
その姿、どこからどう見てもキュウリ泥棒にしか見えない。

「ぶほ、ぶほほんほふ――」

「いや、何言ってるのかわかんないから。まずは口に含んでるものを飲み込め」

ゴクリ――嚥下する音が河童の喉より響く。
多少無理して飲み込んだのか、若干涙目な河童。

「わ、私はキュウリ盗ってないよ？」

「なんで疑問系？　それを言うんならまずポケットからはみ出てる緑の物体を仕舞ってから言いなよ……」

「え？　あっ――」

溜息交じりの天狗に指摘を受け、河童はポケットより顔を出しているキュウリを無理やり押し込んだ。
そうして再度こちらを向き、苦い笑みを浮かべて乾いた笑声を零す。

「はぁ……」

どんだけキュウリ好きなんだよ――心中でそんな事を思いつつ、天狗は河童のアレな行動に頭痛を覚えた。

「ラミアさんも何か言――――」

「ぶほ？」

天狗の視線に入ったのは、口をパンパンにして目を丸くしている吸血鬼であった。

「……お前もかい」

「ぶほ、ぶほほほんほほ――――」

「だから、口の中のものを飲み込みなさいって！」

ゴクリ――嚥下する音が吸血鬼の喉より響く。
多少無理して飲み込んだのか、若干涙目な吸血鬼。

「お、俺はキュウリ盗ってないよ？」

「そ　れ　は　も　う　い　い。てゆーか、元々ラミアさんのでしょうが」

ああ、やばい。阿呆のせいで頭が頭痛で痛い。
天狗は片手でこめかみを軽く押さえ、目を瞑る。

「そんな事より、私のカメラはどうなったんですか？」

当然の事だが、平安の日本にカメラなど在りはしない。
外国でも、未だ人の手によって創られていない。
何より『其処に在るモノを写す』という方法は今の時代、絵に残す他に存在し得ない。
それは古今東西共通であり、日本もまた例外ではなかった。ならばなぜ、天狗はカメラを当然のように所有しているのか。

答えは自明。人間を越える技術力を持つ存在がいたのだ。
その存在こそが河童である。人間、妖怪――地上に存在するあらゆる種族の中でも最高の技術力を誇る妖怪。
１００年後、１０００年後にどうなっているのかは不明だが、この平安の時代では群を抜いて河童が最高峰だった。

「ん、ちょっと付いて来て」

そう言うと、河童は二人を近くに建っている自分の家へ案内した。
二人に部屋の座敷へ座るよう促し、河童は置くにあるラボへ入って行く。
数分後、河童は天狗のであろうカメラを片手に帰って来た。

「大分ガタがきてたみたいだったよ。一通りメンテしといたけど、そろそろ買い換えた方がいいと思う」

天狗にカメラを渡しながら、難しい顔で河童は言った。
そんな河童を一瞥しながらカメラを受け取った後、天狗は肩を竦めて苦笑する。

「そう簡単に言わないでよ。河童だから分かってると思うけど、カメラってかなり値が張るんだから」

「だよねぇ……」

天狗の苦笑に河童も同じく苦い笑みを浮かべて言葉を返す。
そんな二人を見比べながらラミアは二人へと尋ねた。

「そんなに高いのか、カメラって？」

「百貫文」

「は？」

河童の言う『百貫文』の意味が分からなかったのか、ラミアは首を傾げて聞き返す。

「カメラの値段」

「付け加えますと、河童ならどんなに贅沢しても一月は遊んで暮らせる額ですね。質素倹約すれば1年は普通に暮らせます」

天狗の補足を聞いてようやくカメラがどれほど高価なものかをラミアは理解した。
唾を嚥下し、天狗の手中にあるカメラを凝視する。

「ってことは――」

「はい、とても庶民に手が出せる代物じゃ無いです」

天狗や河童が言うには相当な品らしいが、ラミアにはとてもそんな凄い物には見えなかった。
どれほど凝らして視ようとも、ガラスの付いた蓋の無い変な形の箱

にしか見えないのだ。
到底、天狗の言うような一年は遊んで暮らせるほど値が張る物に見えない。全く以って、見えない。

「そんな大層なモンには見えんけどなぁ……」

「異国には無いんですか、カメラ」

「カメラはおろか、それを創った河童すらいないね。まぁ、俺の知ってる範囲でだけど」

「そうなんですか」

天狗は適当に相槌を打つと、カメラのレンズ越しに部屋を見る。
特にどこを注視するわけでもなくカメラを泳がせ、最後にラミアの姿をレンズに捉えてシャッターを切った。
パシャリ、という乾いた音と不意に光ったフラッシュのせいでラミアは怪訝そうに眉を顰める。

「何、さっきの？」

「写真を撮ったんですよ」

そう言うと、天狗は悪戯な笑みを浮かべた。
ラミアは天狗の持つカメラのレンズを覗き込みながら、何かに合点が言ったのか小さく首を縦に数度動かした。

「あー、そうやって撮るのね。てか一瞬で撮れるモンなのか……スゴイな」

「撮影は対象物をレンズに押えてシャッターを切れば良いだけです。『撮る』という行為だけなら子供でも楽に出来ますね」

「へぇ〜、そりゃすごい」

ただ『撮る』だけなら子供でも出来る。言い返せば、それは『撮る』という行為以外は初心者には困難だということだ。
それに、何かを撮るにしても角度、距離、焦点――あらゆるものを考えなければならない。趣味の一環ならば別段気にする必要は無いが、仕事となれば話は別である。
撮影技術、現像、フィルム交換等――総てを一人で管理し、処理し、行動しなければならない。それをやってのけるこの天狗は何気に凄かったりする。

「それはそうと、話は変わりますけど――」

天狗はカメラを仕舞い、続けた。

「都でまた死者が出たそうですね」

「ん、ああ。たしか死んだのが４人で行方不明が３人だっけか？」

ラミアは視線を上方に向けて泳がせる。
ラミアの言葉を聞き、河童はポケットより取り出した電卓を軽快に叩いた。
その際、ポケットに仕舞ってあったキュウリがボロボロと零れ落ちたのは言うまでもない。

「ってことは、今までのと併せると死者が６８で行方不明が２３だね」

三人で囲っている卓袱台に電卓を置き、床に落ちたキュウリを拾いながら河童は答えた。
そしてキュウリを自身の胸に抱え、部屋の隅に置かれている冷蔵庫の中に仕舞っていく。

「よく知ってんな、にとり」

「妖怪の間でも有名だからね、悪い意味で」

河童こと河城　にとりはバツが悪そうに言いながら冷蔵庫を閉める。

「天魔様も『最近不穏な動きが目立ってきておる』とか言ってましたからねぇ……」

天魔と呼ばれる存在のマネをしながら天狗は言った。
ラミアは難しい顔で胡坐を掻いている膝の上に肘を突き、顎を手で支える。

「天狗のカシラが言ってるんならマジでヤバイかもな……ブンさんから見てどうなのよ？」

「……前々から言ってますけど、私の名前は文とかいてアヤですから」

「あー、そだっけ？」

「……この痴呆め」

「え、何か言った？」

「いいえ、何も。それで私から見た、というより天魔様の推測なんですけど――」

手帳を開き、天狗―射命丸　文―は二人へと語り始めた。

二幕：４話『進展する物語＋河童と天狗』（後書き）

感想、ご意見等気軽に書いてやって下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9531h/

とある吸血鬼の話

2010年10月9日23時36分発行